皇太子の結婚
～虐げられた令嬢は帝国の太陽に溺愛される～

クマ三郎
Kumasaburou

Regina BUNKO

登場人物紹介
アレクシス
フロイエン帝国の皇太子。
容姿端麗かつ有能極まりなく、
『フロイエンの太陽』と呼ばれ、
国民からも敬愛されている。
アンブロワーズ
フロイエン帝国の
皇帝にして、
アレクシスの父。
カトリーヌ
フロイエン帝国の皇后で、
アレクシスの実母。
ニネット
フロイエン帝国の
皇妃(第二妃)。
ローズマリー
アディントン侯爵家の長女。
家庭内で不遇な境遇に
置かれていたが、ある日突然、
皇太子・アレクシスから婚約の
申し出を受けて……
パトリス
ローズマリーの友人。
ディアナと婚約の話が
進んでいる。
エヴラール
アディントン侯爵。
娘のローズマリーに
無関心に見えるが……
ジョアンナ
ローズマリーの
義母。
ディアナ
ローズマリーの
異母妹。

目次

皇太子の結婚
～虐げられた令嬢は帝国の太陽に溺愛される～ 7
優しい未来へ 255
書き下ろし番外編
時を経て繋がる縁 355

皇太子の結婚

～虐げられた令嬢は帝国の太陽に溺愛される～

プロローグ

日当たりのいい広く豪華な室内は、春にはやや遠いこの季節でも暖炉がいらぬほど暖かい。

大きな硝子窓から注ぐ光は、床一面に貼られた大理石を一層輝かせている。

窓のすぐ側で神経質そうな音を立てながらペン先を走らせているその人は、ローズマリーが入室してしばらく経つのにもかかわらずこちらを見ようともしない。

ローズマリーの暮らす屋敷に皇宮から知らせが届いたのは、一週間前のこと。

そこにはただ一言、皇太子殿下に謁見しに来るようにとだけ書かれていた。

そして今、ローズマリーは初めて足を踏み入れる皇太子の執務室で、軽く頭を下げたままいつかけられるかもわからない声をただひたすら待っていた。

「……待たせたな。顔を上げなさい」

低すぎず高すぎず、しっとりとした潤いのある声を間近で耳にするのは初めてで、

ローズマリーは急に緊張に襲われ喉を震わせた。

ゆっくりと顔を上げると、透き通った翡翠色の瞳と目が合う。

心の奥底までを見透かすような強い視線に射抜かれ、時が止まった錯覚に陥る。

長年培ってきた淑女のマナーも一瞬で抜け落ちてしまった。

（……いけない！）

しかしローズマリーは慌てて意識を引き戻す。

「ご無礼をお許しくださいませ。帝国の太陽アレクシス殿下。ローズマリー・アディントンでございます」

今度は抜かりなく淑女としての礼をとる。

すると、再びあの声が優しく頭の上から降ってきた。

「よい。楽にしなさい」

促され、礼を解くと再び翡翠色の瞳と目が合った。

遠目でもわかる白磁のように滑らかで艶のある肌。

無造作に額にかかる黄金の髪は、光を受けて太陽のように輝いている。

皇太子アレクシス。

ローズマリーを呼び出した帝国の太陽は、その形のいい唇から穏やかに声を紡いだ。

「ローズマリー。そなたは今、誰か想い慕う者はいるか？」
「……は？」
さっきから調子が狂いっぱなしだ。
この人の一挙一動で、長年厳しく叩き込まれ身についているはずのことが一瞬で押し流されてしまう。
「あの……殿下、おっしゃる意味が……」
恐る恐る尋ねるローズマリーの様子を見て、アレクシスは「ふむ……」と頷き、一呼吸置く。
そして再び口を開く。
「好きな男はいるか？」
皇宮に呼び出された時は何事かと思ったが、この質問ほどの驚きはなかった。
今、一体、なんて？
「いないのか？」
こういう時どうしたらいいのかなんて、教師からは教わらなかった。
とにかくローズマリーにはそんな相手はいないので、とりあえず首を縦に二回振る。
すると、アレクシスからとんでもない言葉が返ってきた。

「それならば、私と婚約してほしい」
ローズマリーは思わず息を呑んだ。
婚約って……誰と、誰が……？

第一章

ローズマリーが住まうこの国――フロイエン帝国は、元はこの大陸に存在する数ある王国の一つであった。混沌の時代、戦争・悪政などによる二百年にもわたる動乱の中、次々と近隣諸国を征し、帝国として発足してから三百年経った今――

善政を敷く第十二代皇帝アンブロワーズには二人の妃がいた。

友好関係にある公国の公女であった皇后カトリーヌと、フロイエンの建国に貢献した侯爵家の令嬢だった皇妃ニネットである。いわゆる正妃としてカトリーヌを、第二妃としてニネットを娶った形である。

二人の妃との仲は良好だったにもかかわらず、アンブロワーズはなかなか後継ぎに恵まれなかった。

しかし、カトリーヌとの成婚から五年の歳月を経たある日、皇后カトリーヌが懐妊した。

生まれたのは待望の男児。名はアレクシスとつけられた。

長年臣下たちに世継ぎを急かされ続けてきたアンブロワーズは初めての子、そしてそれが男児だったことに我を忘れるほど歓喜し、まだ生まれたばかりだというのに、アレクシスを皇太子に指名した。

それからアレクシスは父の期待以上の成長を見せた。

座学はもとより武芸の才にも秀で、十四の歳には国政に関わるようになった。

およそ神童などという言葉では言い尽くせない。人々は皆、アレクシスをフロイエンの太陽と呼んだ。

帰路につき馬車に揺られる道すがら、ローズマリーは今日何度目かのため息をついた。

「どうしてこんなことに……」

ほんの少し前、我が身に起こった出来事にローズマリーはまだ困惑していた。

フロイエンの太陽、人々が崇め敬う皇太子アレクシスが、自分を婚約者にしたいと言うのだ。

『あの……このことは父も承知しているのでしょうか……？』

父とは今朝家を出る前にも顔を合わせたが、特になにも言われなかった。

『ああ。エヴラールとも先日話をした』

エヴラールとはローズマリーの実父であり、アディントン侯爵家の当主だ。
では父はこのことを知っていて、あえてなにも言わなかったのか。
しかしローズマリーはそれを特に不思議には思わなかった。
父のローズマリーへの関心のなさは、今に始まったことではない。
ただ、皇太子殿下から縁談がきたのなら、普通はもう少し喜ぶものだろうに。
皇族との婚姻は、家門の繁栄を約束されたようなものだ。
もしかして、選ばれたのがローズマリーだったから喜ばなかったのだろうか。
（これがディアナだったなら……）
あの愛くるしい異母妹だったなら、父も喜んだのだろうか。
〝皇太子殿下の前では決して粗相をするんじゃないぞ〟とでも言って、笑顔で送り出しただろうか。
『それで？』
『は？』
それでとはなんだろう。
ローズマリーはアレクシスの意図を汲むことができず、その場に立ち尽くしていた。
『……返事を聞かせてほしい。エヴラールからは、婚約はそなたの意思に任せると言われている』

『父が、わたくしの意思に……ですか？』
アレクシスは、ローズマリーの問いかけにただ頷いて肯定した。
翡翠色の瞳はローズマリーを映したまま動かない。
驚いた。父がアレクシスからの婚約の打診に、異母妹のディアナをすすめなかったとは。
アレクシスはローズマリーの返事を待っているが、皇族からの申し出を一介の侯爵令嬢が断るなんて許されないのは、彼だってわかっているだろう。
しかし、ローズマリーにはかえってそれがありがたかった。
選択肢が一つしかないのだから、引け目を感じる必要もない。
きっとこの先自分を待ち受ける道は優しくないだろう。
（……けれどあの家からは解放される……）
美しすぎる顔を直視することにこれほど勇気がいるとは知らなかった。
ローズマリーは、決して目を逸らさぬよう心の中で己を鼓舞する。
『このローズマリー・アディントン。帝国の太陽であらせられるアレクシス殿下からの婚約のお申し出、謹んでお受けいたします』

ローズマリーが帝都にある屋敷に戻ると、長年執事を務めるモーリスが出迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、ローズマリーお嬢様」

彼はローズマリーの母親が亡くなる前からこの侯爵邸で働いていて、唯一気を許せる人間だ。

ローズマリーを慕ってくれていたメイドたちは、これまでほとんどと言っていいほど継母が解雇してしまった。

「お父様は？」

「旦那様はお部屋におられます。なにか御用ですか？」

モーリスの口振りだと父はローズマリーと話す気はないようだ。

しかし、皇太子殿下との婚約は一家に関わる大事だ。

支度だって貴族同士の婚姻とは比べ物にならないくらい、費用も時間もかかる。

それに、婚約をお受けしたことを報告しないのもいかがなものだろうか。

◆◆◆

このまま部屋に戻るべきか、父に会いに行くべきか逡巡する。

「あら、お姉様！」

その時、玩具を見つけた子供のような声が頭の上から降ってきた。

階段の手すりに掴まりながら、少し早足で下りてくるのは、二つ年下の異母妹のディアナだ。

ローズマリーのくすんだ色の髪とは違う、艶やかな金髪と青い瞳。

薄桃色の上質な生地に、たっぷりとレースがあしらわれたドレスを纏うディアナは、まるで妖精のように可憐で美しい。

「皇宮になんの御用でしたの？」

ローズマリーと目線を同じくするのが嫌なのか、ディアナの足は、階段をあと二段ほど残した場所で止まった。

（お父様からなにも聞いていないのかしら？）

父はローズマリーには無関心でも、ディアナのことは可愛がっている風なのに。

「ちょっとお姉様！　私が聞いているのに、なにをぼうっとしているの？」

ディアナの癇癪はいつものことだ。

我儘で傲慢な性格は昔からで、自分はなによりも優先されて然るべき存在だと思って

いる。
この耳をつんざくような金切り声にも、ローズマリーはすっかり慣れてしまった。
「ごめんなさい、ディアナ。少し疲れてしまったみたいで……」
「だからなにがあったのかって聞いているのよ！」
相手が要求を呑むまでは絶対に引かない強情さにうんざりしつつ、ローズマリーが口を開こうとしたその時だった。
「ディアナお嬢様、パトリス様がお見えになったようですよ」
絶妙なタイミングでモーリスがディアナに声をかける。
「まあ！　パトリス様が？」
ディアナは「うふふ」と含みのある笑い方をしてローズマリーを一瞥した。
そして、エントランスホールに姿を見せた男性、パトリスに向かって嬉しそうに微笑みながら駆け寄る。
「お待ちしておりましたわ、パトリス様」
「やあ、ディアナ。今日もとても綺麗だね。……ローズマリーも、久しぶりだね」
パトリスと呼ばれた栗色の髪に人の良さそうな笑顔の青年は、ローズマリーの姿を見つけると、どことなく気まずそうに挨拶をした。

彼はアディントン家が懇意にしているエメ伯爵家の次男で、ローズマリーの幼馴染。
ディアナとは現在婚約に向けて準備をしている最中だ。
「お久しぶりです、パトリス様」
ローズマリーが礼をするが、まだ頭も上げきらぬうちにディアナが話し出す。
「ねえパトリス様、今日のお夕食はお姉様も一緒にどうかしら」
「えっ……？」
「いいじゃない。ねえ、お姉様？」
ディアナは、まるでローズマリーに見せつけるようにパトリスの腕に絡みつき、挑戦的な視線を向けてくる。
「今日はジョアンナ様も一緒に、婚約式の打ち合わせも兼ねてって言ってたじゃないか。それに、そんな急に誘ってもローズマリーだって……」
「なによ！　パトリス様は私が我儘を言ってるっていうの？」
ディアナはパトリスの言葉を遮り、再びローズマリーに視線を戻した。
「お姉様も、いいわよね？」
いいもなにも、ディアナはローズマリーが首を縦に振るまでは、何度だってこのやりとりを繰り返すつもりだろう。

そうやって最後にはローズマリーを従わせ、悦に入るのだ。
「……わかったわ」
力なくそう答えたローズマリーに、ディアナは満足そうに口角をつり上げた。

自室に戻り、ドレスから簡素なワンピースに着替えると、ローズマリーは重い足取りで食堂に向かった。
途中、モーリスが心配そうな視線をよこしたが、ローズマリーは〝心配しないで〟というように微笑んで見せる。
「あら……」
食堂にやってきたローズマリーの顔を見るなり不快げな声を漏らしたのは、ディアナの実母で、ローズマリーにとっては継母のジョアンナだ。
「私が誘ったのよ。パトリス様と私の大切な婚約式の話だもの。お姉様にも聞いてもらおうと思って」
ディアナはさっきとは打って変わって機嫌が良さそうだ。
経験上、こういう時はあまりいい予感がしない。
「そう……なら仕方ないわね。座りなさい、ローズマリー」

「はい……」
通常ローズマリーがこの継母と異母妹と食事を共にするのは、父親がいる時だけだ。
ローズマリーにも使用人たちにも居丈高な継母だが、父の前でだけは良き妻良き母を演じている。
ジョアンナが、父にずっと叶わぬ恋をしていたのだと教えてくれたのは、人の不幸が大好きでたまらないお喋り好きで有名なご婦人だった。
ジョアンナは、愛する人の心を奪い結婚した、今は亡きローズマリーの母を憎んでいるのだろう。
そしてその母そっくりなローズマリーのことも。
（……なぜ自分を愛さなかったお父様を憎まずに、お母様を憎むのかしら……）
未だ恋をしたことのないローズマリーには、ジョアンナの気持ちはさっぱりわからなかった。
「婚約式までまだまだあると思っていたけど、もう来月なのね。あっという間だったわぁ。ね、パトリス様！」
ディアナはどこかわざとらしい、甘ったるい声を上げた。
「そうだね……」

パトリスは、チラチラとローズマリーのほうを気にしながら、遠慮がちにディアナに相槌を打つ。
「んもう！　今日はどうしてそんなに上の空なの？　……わかった！　お姉様がいるからね？」
「ち、違うよディアナ。それは君の気のせいだよ」
「遠慮しなくてもいいのよ、パトリス様。それとお姉様もね。だってパトリス様は、元々お姉様のお知り合いだったんですもの」
ローズマリーにとって、パトリスは心の内を正直に打ち明けられる数少ない友達だった。
ディアナは昔から、ローズマリーのものをなんでも欲しがる。
たとえ道端に落ちているゴミだろうと、ローズマリーがそれを大事にする素振りを見せれば、ディアナは無理矢理奪い取るだろう。
それがわかっていたから、ローズマリーは親友であるパトリスをディアナに会わせないようにしていたのだ。
「私とパトリス様がこんなことになってしまって、お姉様も気分が悪かったわよね。本当にごめんなさい」

殊勝な言葉とは裏腹に、ディアナの顔にはうっすらと笑みが浮かんでいる。
なにがあっても心を揺らさないこと。
それだけがローズマリーの矜持を守る唯一の手立てだった。
だがまるで動じないローズマリーの態度はジョアンナの気に障ったようだ。
「まあディアナったら！　なんて健気な子なのかしら。それに比べてローズマリーは可愛げがないったら……なんとか言ったらどうなの？」
ジョアンナが不機嫌そうに、手に持っていた扇をバチンと鳴らす。
このやりとりもいつものことだ。
可哀想なのはディアナで、悪者はローズマリー。
「……私はなんとも思ってないわ、ディアナ」
「え？」
ディアナは、まるで虚を衝かれたようにポカンとする。
そして次に戸惑うような表情をして、再びローズマリーに向かって口を開いた。
「そんな、無理しなくていいのよお姉様。恨み言の一つくらいあるでしょう。聞いて差し上げてよ？」
「いいえ。私は二人のことを心から祝福しているわ。本当におめでとうディアナ。そし

てパトリス様も」

今度はディアナだけでなく、ジョアンナもパトリスも驚いた様子でローズマリーを見てくる。

「そして私からもご報告があります」

「報告？　なによ」

ローズマリーは、訝しげにこちらを見るディアナに向かって告げた。

「私、このたび皇太子アレクシス殿下と婚約することになりました」

◆◆◆

『お姉様が皇太子殿下と婚約？　う……嘘よ！　そんなことあるわけないじゃない！』

あの時のディアナの顔ときたら傑作だった。

長い間、感情を抑えることを余儀なくされて生きてきたせいで、自分は性格が悪くなってしまったのかもしれない。

いや、それともこれは生まれ持った性質だったのかも。

そんなことを考えながらローズマリーは、目の前に置かれた美しい茶器から立ち上る、

上質な紅茶の香りにうっとりとしていた。

あのあと、ジョアンナとディアナからは、パトリスの前だというのに散々〝この嘘つきが〟と罵られた。

だがしかし、今朝ローズマリーを迎えに来た馬車に刻まれていたのは、皇族専用であることを示す皇家の紋章。

この馬車を使用できるのは皇族と、その許可を得た者だけだ。

ジョアンナとディアナはそれに気付くなり、悔しそうな顔で押し黙った。

ようやくローズマリーの言ったことが嘘ではなかったとわかったのだろう。

アレクシスは今日も執務机に向かい、せわしなくペンを走らせている。

前回来た時は、執務机と政務に必要な家具以外置かれていなかった室内に、今日はお茶を飲むのにちょうどいいテーブルと、揃いの猫脚のソファが置かれていた。

ソファには光沢のあるピンクのベルベットが張られていて、まるでおとぎ話に出てくる家具のようだが、お値段は想像を絶するに違いない。

けれど本当に可愛らしくて、もし周りに誰もいなかったらきっと〝可愛い！〟と声を上げていたことだろう。

アレクシスは、ローズマリーが入室すると書類に目を向けたまま――

『茶を淹れさせるから、それを飲んで待っていなさい』
と言って、控えていたメイドに給仕を命じた。
テーブルに置かれた三段のハイティースタンドには、色とりどりのケーキやマカロンが食べ切れないほどのせられている。
もしかしてアレクシスは、前回ローズマリーが頭を下げたまま待っていたことを気にしてくれたのだろうか。
（だからこんな、彼の執務室には似つかわしくないソファを？　私のために？）
しかし、ローズマリーはすぐに頭の中からその考えを追い出した。
（そんなこと、あるわけないわよね）
少し調子に乗りすぎだ。ローズマリーにそこまで心を配ってくれる人などいやしない。
ふと、ペンの走る音がやんだのに気付く。
「待たせたな」
アレクシスは立ち上がるとソファまでやってきて、ローズマリーと向かい合わせに座るとティーカップに手を伸ばし、そっと口をつけた。
音一つ立てずに嚥下するその様は、至極優美でつい見入ってしまう。
（なんて美しい人だろう）

しかし、その言葉はアレクシスには適当ではないかもしれない。
（フロイエンの太陽……そう、まさに太陽だわ）
煌めく黄金の髪に照らされて、白磁の肌は一層艶めき輝いている。
そして、その美しく透き通る翡翠色の瞳に、ローズマリーの頭の中に幼い頃の記憶が蘇った。
（そういえば昔……翡翠色の綺麗な羽の鳥が、庭に遊びに来ていたわね……）
美しい羽とさえずる声が可愛くて、毎日のように庭に出ては、厨房で分けてもらったパンくずをあげていた。
けれど、それをどこからか見ていたディアナは、その鳥を捕まえるよう使用人に命じて籠の中に閉じ込めてしまった。
野生の鳥にそんなことをすれば死んでしまうと、何度言ってもディアナは聞いてくれない。
けれどローズマリーは根気強くディアナに訴え続けた。
するとディアナはジョアンナに言い付けたのだ。
すぐさま飛んできたジョアンナは、『しつこい！』と言ってローズマリーの頬を叩いた。

そしてジョアンナは、その日の夕食にローズマリーが出ることを許さなかった。
父に、赤く腫(は)れたローズマリーの頬を見られたくなかったのだろう。
その数日後のことだった。
ディアナは翡翠色の鳥の死骸が入った鳥籠をローズマリーの部屋に投げ込んで言った。
『もういらないからあげる』
綺麗な顔を歪めるようにして笑いながら。
「浮かない顔だな」
アレクシスの声に、ローズマリーはハッと我に返る。
「いえ……申し訳ありません。ついぼうっとしてしまって……」
「この婚約にあまり乗り気ではないのか」
「そんな！　そんなことは……むしろわたくしのような者にはすぎたお話だと……そう思っております」
それはローズマリーの本心だった。
アレクシスの婚約者がアディントン侯爵家の娘に決まったと社交界に知れ渡れば、人々は皆ローズマリーではなくディアナのことだと思うだろう。
異母妹は、華やかで美しい容姿をしている。

一見気位が高そうで近付きがたい印象なのに、目が合った途端に愛くるしい笑顔を見せ、たちまち人を魅了する。
（きっとアレクシス殿下も……）
「そう謙遜(けんそん)することもないだろう。君は優秀だとエヴラールから聞いている」
「父からですか？」
「そうだ」
（父が私の話を他人に？　しかも皇太子殿下にするなんて……）
家にいてもろくに顔を合わせることもない。ここ数年は会話もなく、挨拶程度しかしていないのに。
「正式に婚約する前に、今度の夜会で発表しようと思う」
「夜会ですか」
「ああ」
アレクシスの婚約者として隣に立つのなら、それ相応の装(よそお)いをしなければならない。
しかしそんな支出をあの継母と異母妹が許すとは、ローズマリーには到底思えなかった。
通常の夜会でもディアナは、ローズマリーが自分より目立つドレスを着ることを許さ

ない。

だからローズマリーのクローゼットには、流行とは縁のない、地味な色合いのシンプルかつベーシックなドレスしか入っていない。

「そう悩むことはない」

彼はローズマリーにそれだけ言うと、扉の向こう側へと向けて声を発した。

「入れ」

低く響くアレクシスの声が伝わると、扉が開き、たくさんの生地を抱えた女性たちが入室してきた。

（な、なに？）

そしてその列の最後には、流行のドレスに身を包んだ貴婦人が。

貴婦人は、アレクシスとローズマリーに向かって丁寧に礼をすると、にっこりと微笑んだ。

「このたびは帝国の太陽、アレクシス殿下にお声がけいただきまして誠に光栄でございます。ミラベル・ボーと申します」

ローズマリーはその名前に聞き覚えがあった。

ミラベル・ボーといえば、帝都の一等地に本店を構え、流行の最先端を走り続ける大

人気のドレスデザイナーだ。

優雅で上品、時に大胆さも見せるドラマチックなデザインは、今、夜会で最も貴婦人たちに好まれている。

「呼び付けてすまなかったな。彼女が私の婚約者になるローズマリーだ。よろしく頼む」

「お任せください！　このミラベル、ローズマリー様に帝国一の美しい装いを御用意いたしますわ！」

ローズマリーはわけがわからず、アレクシスとミラベルの顔を何度も何度も交互に見る。

「で、殿下？　あの……」

しかしアレクシスは、〝行ってこい〟と言うようにひらひらと軽く手を振るだけで、なにも答えてくれない。

ミラベルはというと、黙ったままローズマリーの上から下までを凝視している。

今日は皇宮への訪問ということで、常よりは若干華やかにしてきたつもりだ。

だがしかし、やはり継母と異母妹が許可する範囲内のドレスだけあって、色彩もデザインも、流行なんてまるで関係ない地味で簡素なもの。

（呆れられているのかも……）

こんな女が帝国の皇太子の婚約者だなんて、きっとミラベルも、その後ろに控える彼女の助手たちも、さぞかしがっかりしていることだろう。

しかしミラベルはローズマリーを凝視し終えると、今度は険しい表情でなにやらブツブツと呪文のように唱え出した。

「ローズマリー様は、とにかく肌が白くてきめ細やかでいらっしゃるから……色は濃い目かしらね……でも美しいアッシュブロンドの髪にはやっぱりこっちかしら……ローズマリー様！　ちょっとこちらへ！」

「えっ？」

言うなり、ミラベルはローズマリーの手を引いて移動する。

部屋の一角にはいつの間にか絨毯が敷かれており、その上にはまるで一面の花畑のように生地やレース、ビーズやスパンコールといった材料が並べられていた。

「まあ……」

ローズマリーは思わず感嘆の声を漏らすが、うっとりとできた時間はごく僅か。

「え？　え？　ええっ？」

ミラベルはローズマリーをくるくる回したり、次から次へと生地を当ててみたりして

はなにかを呟いている。

ローズマリーは戸惑い、助けを求めるようにチラチラとアレクシスを見るが、彼は既に執務机へと戻ってしまっている。

そして部屋には再びペンの走る音が聞こえ始めた。

書類を見つめるアレクシスの口元は、ほんの少しだけ綻んでいた。

◆◆◆

ドレスのデザインがミラベルの中で固まってきた頃、アレクシスはローズマリーを帰宅させた。

そしてミラベルには少し残るように言い、助手たちも退出させる。

ミラベルは、さっきまでローズマリーが座っていた猫脚のソファで、ドレスのデザインをスケッチしながらアレクシスの執務が終わるのを待っていた。

やがて、カリカリと神経質そうなペンの音が止まると、アレクシスは深いため息を一つついたあと、立ち上がる。そしてソファまでやってきて、ミラベルと向かい合わせに座った。

「そなたも忙しいだろうに、すまなかったな」
「いいえ、帝国の太陽とお話しさせていただくなんて滅多にない栄誉でございますわ。ですが、どうなさったのですか？」
「ローズマリーのことについて、客観的な見解を聞きたい。アディントン侯爵家はそなたの店の顧客なのだろう？」
アレクシスは、ローズマリーを初めて見かけた時に抱いた疑問を思い出す。
皇宮で昨年開かれた、アレクシスの父である皇帝アンブロワーズの生誕の宴。
その日、フロイエンの貴族は家族で参加し、皇帝の前に出て挨拶をすることになっていた。
ここぞとばかりにめかしこんできた香水臭い女たち。
その中になんとも陰気そうで地味な女がいる。
アレクシスはなぜか、その女のことがとても気になった。
壁の花どころではない。まるで人と会うのを避けるかのように柱の陰に隠れている。
一歩間違えると不審者だ。
（家族は……どこだ？）
今日だけはよほどの理由がない限り、周囲に家族がいて然るべきなのだが、それらしき人物はどこにも見当たらない。

彼女は一体どこの誰なのか。それが判明したのは、各家門ごとの皇帝への挨拶の場だった。
長く赤い絨毯の上を皇帝のいる玉座に向かって爵位順に並び、順に挨拶をするその場で、彼女はエヴラール・アディントン侯爵の家族として参列していた。
一見三人家族かと見間違う立ち位置。
彼女は横に揃う家族の後ろに一人立ち、やはり下を向いていた。
エヴラールの隣に立つ母親と、妹と思しき女はゴテゴテとした派手な宝石と、最近夜会などでよく見かけるようになったデコルテの大きく開いた豪奢なドレスを身につけている。
（それに比べてなんだ、あれは……）
ローズマリーのドレスは、そのアッシュブロンドの髪にまるで合っていない。しかも夜会には不向きな薄暗い色だった。
そしてレースや刺繍にスパンコール、宝石などの贅沢品は一切ついておらず、布地は良いものなのだろうが、とても侯爵令嬢とは思えない簡素な装いだった。
「……アディントン侯爵夫人とそのご令嬢は、確かにうちのお客様ですわ。けれどロー

ズマリー様は一度もお見えになったことがございません」
「理由は知っているのか？」
「それは……」
いくらアレクシスが皇太子といえど、顧客情報を漏らすことに抵抗があるのだろう。だがその態度に嫌な気はしない。そのほうがかえって信頼が置ける。
「安心しろ。どこにも漏らしはしない」
それに、アレクシスが漏らすまでもなく、世間ではとっくに知られていることなのかもしれない。
姉妹にあれだけの差をつけて公の場に出しているくらいだ。
「殿下は、現アディントン侯爵夫人であるジョアンナ様が、後妻であることはご存じですか？」
「ああ、知っている」
「前アディントン侯爵夫人はお産が原因で命を落とされたようです」
「……それも聞いている」
婚約前の身辺調査は王族のみならず、貴族の間でも当たり前におこなわれることだ。だが、アレクシスがローズマリーの生い立ちについて知ることになったのは、少し違う

事情からだった。
アレクシスがそこまで詳細な事情を知っているとは思わなかったのか、ミラベルは少しだけ驚いた風だった。
「そうでしたか。ローズマリー様のお父上であるアディントン卿は、半ば無理矢理すすめられジョアンナ様と結婚されたそうです。アディントン卿にずっと叶わぬ想いを抱いていたジョアンナ様が、ご自身の父であるドーン伯爵に泣きついたとか。そしてドーン伯爵が愛妻を亡くし気落ちするアディントン卿に〝残された赤子のことを考えるなら、新しい母親がいたほうがいい〟と迫ったようです」
子供のための再婚ならば、ローズマリーはジョアンナの手で誰よりも大切に育てられなければならないはず。
「はじめの頃は夫人もローズマリー様に優しく接していたと聞きます。けれど程なくしてディアナ様を身ごもられて……すべてはそこから始まったようです」
「実の子可愛さに前妻の子を虐げるのは、まあよくある話だな。ミラベル、ローズマリーのあの格好はすべて夫人のせいなのか」
「確かに夫人もですが……その……異母妹のディアナ様が……」
「異母妹？　ああ、あの派手な女か」

ローズマリーを見つけた宴で、皇帝の隣に立つ自分に、あからさまな秋波を送ってきたことは覚えている。
「あの女がなんだ？」
「……ローズマリー様には地味なドレスがお似合いだといつも口癖のように……どうやらローズマリー様が身につけるものは、ほとんどディアナ様が決められているようです」
まだ赤子の頃にやってきた継母と、その後生まれた異母妹。
おそらくローズマリーは、物心がつく前からずっと虐げられてきたのだろう。
同じ子供なのになぜ自分だけと理不尽さを覚えながらも、それを受け入れることを強要させられてきたに違いない。
「あの、殿下はなぜローズマリー様をお選びに……？」
「なぜ？」
なぜかと聞かれると返答に困る。
「……興味が湧いた……」
たった一言、それもかなりぶっきらぼうな言い方に、ミラベルは一瞬呆気にとられるも、すぐに表情を緩め笑い出した。

「なんだ。なにがおかしい」
「も、申し訳ございません……ふふ。帝国の太陽ともなると、色々とお誘いなどもありましょうに……」
確かにミラベルの言うとおり、女性からの誘いなら良くも悪くも山ほどある。
別に女嫌いなわけじゃない。次期皇帝として婚姻を結び、子をもうけなければならないことも充分承知している。
だが、どんな女性を前にしても、どうにも食指が動かないのだ。
そんな時に目に留まったのがローズマリーだった。
みすぼらしい見た目だが、素材は悪くない。
この一年、離れたところから様子を見ていたが、礼儀作法もしっかりしている。
アディントン夫人も、ローズマリーを虐げていたのは許せないが、侯爵令嬢として恥ずかしくない教育を受けさせていたことだけは褒めてやってもいいだろう。
「お前をよんでよかったよ、ミラベル。これからも彼女をよろしく頼む」
これから長い付き合いになるであろうミラベルに、アレクシスは心から感謝の言葉を述べたのだった。

◆◆◆

アレクシスが用意してくれた、行きに乗ったのと同じ皇族専用の豪華な馬車に揺られながら、ローズマリーはさっきまで目の前に広がっていた夢のような光景を思い返していた。

上質な絹。繊細に編まれたレース。宝石にビーズにスパンコール。

今まで一度も許してもらえなかったそれらが、いとも簡単に自分のためだけの、世界でたった一つのドレスに形を変えていく。

本当は羨ましかった。自分の身なりが周りからどう見られているのかもよくわかっていた。

暗く地味な色で仕立てられた流行遅れのドレス。

けれどディアナと同じようなドレスがいいと言えば叩かれ、お前のような不器量には分不相応だと継母から罵られた。

そのうちに諦めることが上手になって、それでもやはり恥ずかしさは消えてくれなくて、夜会のたびに下を向き、柱の陰に隠れるようにして過ごしていた。

こうしていれば、みすぼらしい自分が誰かに見つかることもない。

大丈夫、大丈夫だとずっと自分に言い聞かせてきた。

けれど――

こんなに惨めでどうしようもなかった自分の人生が変わろうとしている。

アレクシスがそのきっかけをくれたのだ。

手の届かない雲の上の人だった彼が、どうして自分を婚約者に望んでくれたのかは皆目見当もつかない。

けれど、彼の側で自分は生まれ変われる。そんな気がしてならなかった。

アディントン侯爵邸の敷地に入ると、玄関へと続く道の両側には明かりが灯されていた。

（すっかり遅くなってしまったわね）

馬車から降りたローズマリーをいつものようにモーリスが出迎えてくれたが、なんだか彼の顔色が良くない。

「どうしたの、モーリス。具合でも悪いの？」

ローズマリーが心配して声をかけると、モーリスはまるで急ぐように小声で囁いた。

「お嬢様、どうか早くお部屋にお戻りくださ……」

「お姉様！」
二つの声が重なった。
甲高い叫び声のするほうに顔を向けると、そこには鬼のような形相でこちらへ向かってくるディアナの姿があった。
鼻息荒いその様子を見るに、どうやらローズマリーが皇宮から戻るのを今か今かと待ち構えていたようだ。
「ただいま、ディアナ」
「ただいまじゃないわよ！　こんな時間まで、一体なにしてたのよ！」
ドン、と強く身体を押され、ローズマリーはよろめきながら後ずさる。
すかさず隣にいたモーリスが間に割って入ろうとしたが、ローズマリーはそれを手で制した。
ここでモーリスがディアナに逆らう形になれば、彼もこの屋敷を追い出されてしまう。
この家で唯一心を許せる彼に辞めてほしくはない。
ローズマリーのそんな気持ちが伝わったのか、モーリスは、迷いながらも後ろに下がった。
「今日はアレクシス殿下から呼ばれたの。朝もそう話したでしょう？」

「そんなこと聞いてるんじゃないわよ！　なにをしてたのって聞いてるの！」
再びドン、と今度は強く肩を押される。
ローズマリーは倒れそうになるのを足を踏ん張って堪えた。
今までディアナはどんなに癇癪を起こしても、ローズマリーに手を上げたりはしなかった。
ひとしきり嘲笑って、見下して、俯くローズマリーの姿を見て満足していた。
けれど今のディアナから、そんな余裕は微塵も感じられない。
まるでひどい嫉妬に駆られて自分を見失っているようだ。
（嫉妬……ディアナが私に……？）
そんなはずはない。ディアナはパトリスとの婚約を来月に控え、今は幸せの絶頂だろうに。
それにディアナがアレクシスに懸想していたなどと、聞いたことがない。
「なんでお姉様みたいに不細工で陰気な女が、アレクシス様と婚約なんてことになるのよ！」
「ディアナ、皇族の方の名を軽々しく呼ぶのは不敬よ」
もし誰かに聞かれれば、皇族に対する不敬罪もしくは反逆罪と見なされ、良くて鞭打

ちと投獄。悪くて死罪だ。
「皇太子殿下、あるいはアレクシス殿下と――」
「あんたごときが偉そうに私に指図しないでよ！　早く質問に答えて！」
「だからそれは……アレクシス殿下が私がいいとおっしゃったから……」
「そんなことあるわけないじゃない！　なんで、なんでよ？　なんで私じゃないの！　なんであんたが選ばれるの！」
「あなたにはパトリスがいるでしょう？」
「うるさい！　うるさい！　うるさい！」
ディアナは何度もそう叫ぶと勢いよくローズマリーの両肩を掴んで力任せに床に引き倒した。
「おやめくださいディアナ様！」
モーリスが止めに入るがディアナはそれを振り払い、床に倒れるローズマリーに馬乗りになった。ローズマリーの視界に、振り上げられたディアナの拳が見える。
「やめ……ディアナ……！　やめてっ！」
頭も顔も関係ない。滅茶苦茶に拳を振り下ろし、ディアナは殴り続ける。
なんとか防ごうと腕で顔を隠しても、真横から拳が入り込んでくる。

「あは、ははっ。いい気味！　あんたは無様な姿がお似合いなのよ。あははっ！」
抵抗できなくなるまで殴られたローズマリーは、遠のいていく意識の中、ディアナの向こう側で楽しそうに口を歪めて笑うジョアンナの姿を見た気がした。

第二章

『これからは一日おきに来なさい。いずれ皇宮に入るにあたって、学んでおかなければならないしきたりや作法がある。だが無理は禁物だ。焦らなくていい。体調が悪い時は遠慮せず休みなさい』
帰り際、太陽のようなあの人と約束した。
だから行かなくちゃ。
けれど頭がひどく重い。
頭だけじゃない。身体もまるで重石（おもし）がのせられているかのよう。
「ローズマリーお嬢様……！」
「……モーリス……？」
顔がうまく動かない。口の中は鉄の味がする。
ああ、そうだ。何度もディアナに殴られたのだった。
きっと殴られた箇所が腫れて、ひどい顔になっていることだろう。

「よかった……なにもできずに申し訳ありませんでした、お嬢様……！」
「謝らないで……」
癇癪を起こしたディアナは気が済むまではなんだってやる。
いつかこんな日がくるのではないかとずっと思っていた。
けれどモーリスがここにいるということは、彼にはなんの被害も及ばなかったのだろう。
そのことに、ローズマリーは心から安堵する。
「私……どれくらい眠っていたの？」
「一日半ほどでございます」
「一日半……大変！」
部屋の隅の柱時計を見ると、もう朝食の時間をだいぶ過ぎている。
今日はアレクシスとの約束の日なのに。
ローズマリーは青ざめた。皇宮からの迎えはまだ来ていないだろうか。
とにかく早く身支度を済ませないと。
しかし、急いで起き上がろうとしても身体のあちこちに痛みが走り、思うように動かせない。

「モーリスお願い、私の身体を起こして！　私、アレクシス殿下のところに行かなくては……モーリス？」
モーリスは、両手でローズマリーの身体を支えながら、悲痛な表情で首を横に振る。
「どうしたの、モーリス」
「……先ほど皇宮より馬車が来ました」
「まあ大変！　それで使者の方は？　下でお待ちいただいているのかしら」
矢継ぎ早に尋ねるが、モーリスは悔しそうに眉根を寄せ、唇を引き結んだままなにも答えてはくれない。その様子に、嫌な予感が頭をよぎる。
しかしそれが現実になるのが怖くて、ローズマリーは他に有り得そうなことを次々とモーリスに向かってまくし立てた。
モーリスが気を遣って、使者には体調不良と伝えてくれたのではないか。
それともアレクシスに急用ができて、今日の予定は中止になったという連絡の使者だったのではないか。
けれど、そのどれにもモーリスは頷いてくれない。
しばらくして、ようやく開かれたモーリスの口から出た言葉に、ローズマリーの頭の中は真っ白になった。

「……皇宮にはディアナ様が行かれました……申し訳ございません、お嬢様……申し訳ございません……！」

◆◆◆

アレクシスの朝は早い。

ローズマリーと対面したあの日、アレクシスはいつもどおりに起床し、いつもどおり執務室の椅子に座って、いつもどおり執務を開始した。

十四歳で国政に関わるようになってからこの十年、一度も変わらない日常だ。

手を止めれば次の業務に支障が出る。

故にアレクシスは、執務に関してだけは人に合わせるということをしない。

そして周りもそんなアレクシスを理解しているため、用があればアレクシスの手が止まる頃を見計らってやってくるようになった。

だからあの日もつい同様に過ごしてしまった。

自分で呼び付けておいて、仕事に区切りがつくまではと、長時間ローズマリーを放置してしまったのだ。

一息ついて顔を上げた時、ローズマリーがずっと頭を下げたまま自分を待っていたことに、ひどく驚くと同時に申し訳ないという気持ちが湧き上がった。

てっきり楽にして待っているものだと思っていた自分の浅はかさに呆れ、情けなくなった。なぜなら、この部屋には椅子一つ置かれていないのだ。

ローズマリーは気にしていない風だったが、どうにも後味が悪かったアレクシスは、翌日側近に高級家具を扱う商会へと連絡をさせた。

ごちゃごちゃとした部屋は好きではなかったし、おまけに支配人がすすめてきたピンクのソファなんて、自分の人生においては論外の代物だった。

だが『女性が喜ぶこと間違いなしです！』と、あまりにも推すから、そもそもこれは彼女のためのものなのだと自分を諭し、渋々承諾したのだ。

けれどこのソファを目にした瞬間の、花が咲いたようなローズマリーのあの表情を見たら、なんだかこれはこれで悪くないように思えた。

「アレクシス殿下！」

そんなことを思い返していたアレクシスの執務室に、栗色の髪を乱れさせ、急いだ様子で入ってきたのは側近のルシオだった。

（ノックもせずに入ってくるとは……まだまだ教育が足りんな）

立ち読みサンプルはここまで